

『脱単位時代』における都市社区をめぐる社会学的研究の展開 朱安新（南京大学）

朱安新です。どうぞよろしくお願いいたします。本日は『脱単位時代』における都市社区をめぐる社会学的研究の展開についてお話しいたします。このテーマは、一見すると環境問題とは何もつながりがないように聞こえるかもしれませんが、1つのエピソードをまずご紹介いたします。

2001年に名古屋大学の博士課程に入ったときに、日本の四大公害で有名な四日市市公害の研究に長年取り組んでいらした吉田先生というお医者さまがおられました。その方が提示したデータによりますと、重慶市での喘息が、四日市市の磯津地区に勝るとも劣らないということでした。

そこで、「中国ではこのような医学的に解明された現象が現実存在しているものの、何故に社会運動、またこれを問題化するための言説形成が成されてこなかったのか」という質問をしました。皆さん、もちろん何か問題がありますと、やはりどこかで痛み、悩みが徐々に問題化されていき、その問題が共有されるようになり、初めて環境問題も含めて問題解決に向かっていくわけです。

しかし、なにゆえに中国では、このようなものが形成されてこなかったのでしょうか。結論を申し上げますと、長い期間、社会主義計画経済体制の下で、中国には社会がありませんでした。この社会とはいかに形成されてくるものなのでしょうか。また、社会の形成にもなって、環境問題も含めて、今後はどのような解決のプロセスが考えられるのか、ということを検討するために、さらには時代的な問いにアプローチするために、今日は発表させていただきたいと思います。

与えられている時間で果たして十分にお話しできるかどうか自信がありませんが、後半のほうは、資料にお話ししたいことを書いておきました。ですので、前半の社区研究、社区をとらえていくための枠組み、パースペクティブ (perspective) がどのようなものかに力点を置いて、自分なりに提示したいと思います。

昨日の会場でうかがった論点ですが、高橋所長の挨拶では、「経済改革、政治改革、社会改革の3つの改革が中国では提唱されているが、経済改革しか取り組まれていないのでは」という点が提示されました。私は、1996年以前の段階では、経済改革優先で、政治改革、社会改革は少し待っていてもよいと認識していたのですが、基調講演においてジャック・ホウ先生は、1998年からは政治改革とともに社会改革も急がなければならないという発言をなさいました。

そして、総合セッションでは、和諧社会は可能かについて、華東師範大学の許紀霖 (XU Jilin) 先生が、断絶について述べられました。階層格差が拡大されることによって農村と都市が隔てられているという意味での断絶ですが、この点は中国の社会学において、近年蓄積されてきた1つの論点です。ここで、今回の話の全体的な方向として、アプローチしなければならない行動に「和諧」というキーワードがあります。中国で実際に生活をし、実生活の実感を持っている若者から見れば、これは政府側が提出した目標にすぎないと認識しています。

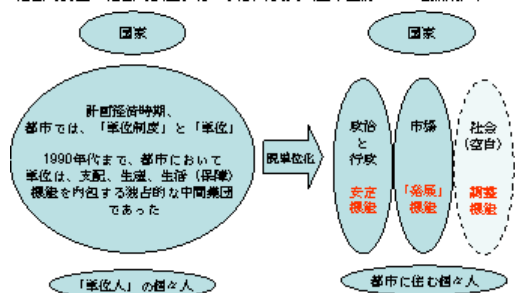
ところで、ここでそれを実現させるためのメカニズムとは何なのでしょうかと。私は、社会学の人間ですから、社会的な立場から近年中国の都市で脚光を浴びている社区を取り上げて議論してみたいと思います。本報告で社区をどのような分析枠組みで位置付けるのか、市場経済化に伴って現れた断絶、バランスが崩れていることの現象の背後に考えられる社会的な要因としては、社会的調整メカニズムの喪失が考えられます。

これは、どのような意味で言っているのかといいますと、計画経済期に中国の都市では、単位制度に基づいた個々の単位によって、国家による都市管理が実現されていました。1990年代までは、都市における単位は、支配・生産・生活保障などの機能を内包する独占的な中間集団でした。ここでは、特に2つの要点があります。1つは機能内

包という点、あともう1つは独占的、つまり国家が単位を握ることによって社会を徹底的に追い出してコントロールをしていた点です。しかも、独占的な中間集団ですから、単位以外の中間集団はすべて否定されていました。このような意味で、都市の人々は都市の個々人、単位人とまで言われていたわけです。極端な場合、小生の所属する南京大学を一步も出ずに生涯生きることもできるというぐらいの単位です。この単位とは、ある種個人にとっては1つの小宇宙を構成するものです。しかし、私は「脱単位化」と書いております。言うまでもなく、これは市場経済化のところで、徐々に国家から経済的な領域が次第に独立性を獲得しつつあるなかで、これまで国家の都市管理の枠では収まりきらなかった社会的な領域、対象が生まれてきました。このように国家が都市をどのようにしてコントロールするのかということに急遽考え始めているところ、というのが実情です。

本報告で、「社区」をどのような分析枠組みで位置づけるか。

市場経済化に伴って現れた「断裂(断絶)」(孫立平 2003)、「失術(バランスが崩れていること)」(孫立平 2004)現象の背後に、考えられる社会的要因: 社会的調整メカニズムの喪失(田中重好 2008を採用)。



この図式ですが、中国では支配構造、政治と行政、市場、そして社会という枠組みを考えています。皆さんは「安定」とおっしゃっていますが、おそらく一党独占的な支配が続いている限り、しばらくこの安定は続くでしょう。安定を保障するための機能は、しばらくは存続すると思います。

2つ目は発展です。富の生産という意味の発展です。中国では1990年代から市場メカニズムが根つき始めました。今、さらに進化しています。そこで、先ほど申し上げました吉田先生の四日市の事例と重慶の事例を考えていただきたいと思います。

社会が空白なのです。個人の痛み、悩み、それでも物事が言えない、語るができない環境、

自然。彼らの悩みはどのようにして問題化されるのでしょうか。このような解決に向けての問題化というメカニズム、そのメカニズムを担うための組織やそれに基づいた構造が形成されないと、環境問題も含めて社会問題が解決されないままになると思います。ならば、社会とは何でしょうか。そして社区とは何でしょうか。「社会主義国家には社会問題があるわけがない」とは、毛沢東の言葉だそうです。社会問題を研究対象にするブルジョアジー (bourgeoisie) な社会学は、断子断孫が、根こそぎ消してしまうという状態にするべきだと、1950年代初めに議論されていたわけです。

この結果、社会主義計画経済時代の環境問題は、例えば化学物質によって引き起こされた小学校の水汚染では、既に水俣病の症状を現し始めている住民がいましたが、ほとんど体制側によって隠蔽されてきました。

ですから、そのときは実際に環境問題が存在していたものの、社会主義のイデオロギーで問題視されることはありませんでした。社会主義体制に入ってから1970年代末期までは、社会的問題が公的には存在していませんでした。国家から自立した社会がありませんでした。しかし、1990年代から始まった市場経済化の過程で、社会的集団が徐々に現れてきました。国家によってつくられながら客体として、対象としてつくられながら現れてきました。

ここで暫定的に定義してみますと、1つは地理的境界を持つ社会的集団、都市では社区です。2つ目は、地理的境界を越えてしまう社会的集団です。

今回の報告の目的である、環境問題解決に向けて重要な点として挙げられるのは、他者同士による広範な議論の展開、そしてそれに基づいた行路の形成という言い方を榎根先生がなされています。榎根先生は、「次なる社会システム」というキーワードを掲げて、社区研究は「環境問題を解決するための1つの学問である」と主張なさっている方です。榎根先生との麗江研究では、先生は次のようにおっしゃっていました。「少数民族区域において環境保全が実現できるためには、地域におけるボトムアップ的な合意形成、すなわち行路の形成が重要になってくる。それに向かって、

これから社区が重要な役割を果たすと考えられよう」と。

今回の報告の目的は、先ほどの2つを顧みながら、もう1つは外国研究者に向けて、加々美先生もいらっしやいますし、ご高名な毛里先生、諸先生方もいらっしやいますので、研究者に向けて中国国内に蓄積されている都市社区研究の流れと到達点を紹介して、これからどのような視点での社区研究が求められるのかについて議論を仕掛けてみたいと思います。

社区を理解するための手がかりとして、学問的に中国の伝統的な社会学研究におけるコミュニティという意味の社区があります。もう1つは、現実的に改革開放、そして1990年代から始まった市場経済化の過程で社区サービス、社区づくりの施設展開で再び脚光を浴びてきた行政的な社区があります。

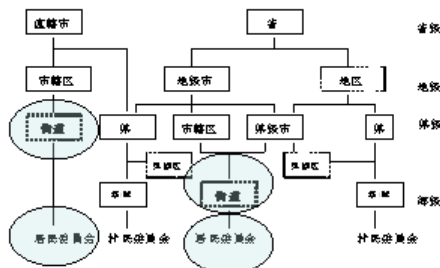


図1 中国都市における都市、街道と居民委員会 (1999年)
①④中の街道は、街道弁事処の略称、②③は行政区、民族自治区は省略している。⑤は、人民代表大会及び人民政府が置かれ、1つの行政ユニットを構成する区画を示し、⑥は、上級政府の管轄範囲のみが置かれ、1つの行政ユニットとして維持されない区画を示す。⑦この図は、『中国都市の発展』(王冠雄 編著 1999: 220) を参照した。

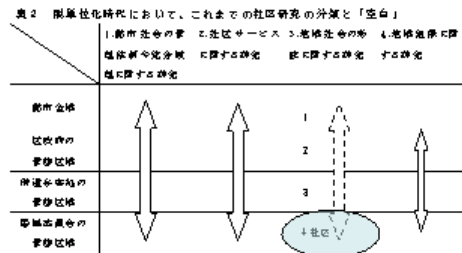
はっきり申し上げますと、学問的な意味での社区と、現在現実的に存在する都市社区とは別々の文脈に生まれたものです。展開はいたしません。ごく簡単に紹介いたします。現在の都市社区とは実際どのようなものなのでしょうか。丸を付けてあるのが、街道弁事処と居民委員会です。街道弁事処は、末端行政機構の出先機構です。居民委員会は、法律上は住民自己管理組織と規定されていますが、中国の場合、往々にして街道弁事処の出先になっていることがほとんどです。実態としても言説としても、このようなものがメインです。

計画経済期には、国家は都市においてはほとんど単位を通して都市の人々を管理していました。単位から落ちこぼれた人々は、市政府、区政府、街道弁事処、居民委員会のラインを通して管理をしていたわけですから、これが、居民委員会のソース

の推移です。

そして、脱単位時代における都市社区をめぐる社会学的研究の展開ですが、1つには脱単位時代における都市社区をめぐる研究の展開があります。

2-2 これまでの都市社区研究における「空白」



これまでの都市社区研究の文脈と空白です。1つ目の文脈としては、末端における国家権力の統合と強化の文脈です。これは明らかに国家が新しい経済体制の時代に、都市をコントロールするための行政的視点です。2つ目は、都市統合原理をめぐる社区対単位の文脈です。3つ目は、社区サービスの文脈。4つ目は居民委員会を都市の末端政権と各家庭の間に介在する住民組織ととらえた研究です。あとは主流的な研究ではありませんが、このような類のものがあります。

次に、これまでの都市社区研究における空白部分についてです。横軸には1つ目として都市社会の管理体制や統合原理に関する研究、2つ目は社区サービスに関する研究、3つ目は地域社会の形成に関する研究、4つ目は地域に関する研究。縦軸では中国の都市空間、行政区画の地区に沿って下降してきますと、都市全域、区政府の管轄区域、街道弁事処の管轄区域、社区居民委員会の管轄区域に分けられます。これまでの研究を見ていきますと、1については都市社区研究の文脈が1と2に該当します。単位体制に基づく都市管理制度では、1980年代から単位外部に生じた都市社会の成長に対応できなくなった現状にあり、都市末端行政機構の改革が促された点を取り上げられています。また、1980年代後半からの改革開放政策によって、従来の計画経済に代わり、商品経済、市場経済が確立されてくるなかで、単位統合に取り代わって行政主導の社区統合が必要となった

という議論もなされています。

これまでも、社区サービスの議論はなされてきました。1と2の部分の社区研究に共通する特徴として、都市行政の改革や施策展開に研究の視点が置かれています。これらの先行研究では、ポスト単位自体に都市行政機構の市政府や区政府と共に、街道弁事処の都市管理の責務や権限がいかに強化されてきたかが明らかにされています。

4番目の地域組織に関する研究は少ししか出ていませんがあります。ここで、地域社会の形成に関する研究ですが、地域社会については先ほど説明いたしましたとおりに、社会的な調整機能を持つというユニットです。ここは先行研究に萌芽的なものがあったものの、一切展開されてきませんでした。

ここで主張したいのは、確かに社区は国施策によってつくられてきた新しいユニットですが、その影響を受けながらも、また、あまりこの影響を受けないで、都市社会にはおいてどのような自発的、社会的なものが生まれているのか、という点です。そのようなものの背後にある、ある種の活動性、組織性、構造的性、思想性みたいなものを丁寧に掘り下げていく研究が必要になってくると思われまます。

以上を踏まえると、中国都市社会の変化について正確な認識を得るためには、既存の研究成果を引き継ぎながら、しかし、行政的な影響を受けすぎないかたちで、新たに生まれている社会的な側面を地域社会という枠組みでとらえていく社会学的な視点が必要になってきます。このような研

究視点が向かう先とは、これからの展望は理想も含めて論理が飛んでいます、これまで中国では、国家単位を通して一切の社会的資源が独占されてきました。しかし、現在単位改革と社区づくりが進んできています。共産党組織などの単位の組織資源が、自由流動資源化されつつあります。その結果、政策の許される範囲内で、社区組織が自由に形成される可能性が開かれました。つまり、社会の一形態としての社区にとって、自由活動空間が増え続けているのです。さらに、社区住民の社区に対する認知が向上してきていることも、社区の今後の変革を促す条件になると考えられます。

先進的社区から確認できた社区の成長が、今後も積み重ねられていくことによって、将来、社区が社会の空白を埋めていく力にまで成長していく可能性もあるだろうと考えています。どうもありがとうございました。

○座長 どうもありがとうございました。ただいまの発表は、日本での経験も生かしながら中国社会、とりわけ都市社会を見たときに、従来、農村社会などの研究を拝聴いたしますが、都市のなかでの末端組織から築き上げていく都市社会の組織、そのありよう、そのなかでの機能、そのあたりの研究は従来あまりなかったように思います。その点で、朱先生の研究はひとつ切り込んでいったという感じがいたします。どうもありがとうございました。そうしましたら、次は孫先生のほうにお願いいたします。

「青海省における生態環境の総合的整備とその成果」

孫発平（青海省社会科学院）

各位专家学者大家好！我是来自中国青海省社会科学院的孙发平。青海省是中国最不发达的省份之一，我在这里着重向各位介绍一下青海省的生态环境问题。从中国来讲，青海省的生态地位特别重要，为什么重要，我们先看一看青海省的区域图，青海省位于中国西北的南部，北面与甘肃、新疆接壤，南面与四川、西藏接壤，东面与甘肃接壤。全

省的总面积是72万平方公里，差不多是两个日本的面积。但是人口很少，全省的总人口按照去年的统计为551万，人口密度每平方公里不到8个人。青海省可以说由青海湖而得名，青海湖是中国最大的内陆咸水湖，在中国评选的中国五大最美丽湖泊中，青海湖排名首位。青海从它的地理结构上来看，属于世界屋脊青藏高原的东北部，全省平均海拔在